

# アフリカの人々と名付け 19

## 父親に因む名前、祖父に因む名前

小馬 徹

### 二項連名と三項連名

アフリカでは、姓をもたない民族が多く、自分の個人名と父系の先祖の個人名を連記して正式名とする場合が多い。この方式は、二項連名方式（父子連名）と三項連名方式（祖父父子連名）とに大別できる。一般化すれば、前者は「Aの息子〔娘〕B」、後者は「Aの息子のBの息子〔娘〕C」と表せる。

しかしながら、三項連名方式でも、実際には祖父の名前を表明する機会は少ない。アフリカに限らず、この事情はイスラム圏やユダヤ人でも同じである。例えば、イラクの現大統領は、通常サダム・フセイン、つまり「サダムの息子フセイン」とのみ名乗っている。

即ち、二項連名方式と三項連名方式は、本質的には同じ思想を共有していると言える。

### 「家」をめぐる政治

ところが、二項連名方式では、本人の名前を省いて「Bの息子」とだけ呼ぶのが正式とされた文化もある。例えば、ケニアのキプシギスなどのカレンジン諸民族がその好例である。男性がイニシエーションを受けて成人し、「Bの息子」という父称（patronymic）を貰った後は、かつては、ごく親しい人を除いて彼のそれまでの名前を口に出来なかった。

因みに、20年ほど前、古代ユダヤ人を扱ったアメリカのスペクタクル映画『ベン・ハー』が大評判をとった。タイトルは「ハーの息子」の意味である。これらの例では、父称には苗字にかなり近い機能が見られる。

エチオピアのコンソ人の場合、司祭だけが始祖の個人名に由来する苗字をもち、傍系の者は次々と系譜上の分岐点に位置する先祖の個人名を苗字として行く。ブルキナファソの

モシ人の苗字もこれに似る〔連載8参照〕。これらの事例には、「家」の観念に基づく政治の一つのあり方が窺える——なお、人類学で言う政治とは、個人や集団の間の葛藤や紛争とその調停を言う。キプシギスの平等制社会には、苗字がない。だが、一人の男性の息子たちは、「B<sub>1</sub>の息子」「B<sub>2</sub>の息子」…のように、母親単位の家ごとに往々父称を変える。この例でも「家」の政治と父称が結び付き、苗字の観念の萌芽が既に見出される。

### 祖父に因む二項命名法

同じ伝統的な「支配者なき社会」でも、以上とは大きく異なる例がある。例えば、ケニアのバントゥ語系のルイア諸民族では、(1)誕生直後母親が与え、幼少年期に用いる複数の愛称、(2)男性ならイニシエーション直後に同年齢の仲間から、女性なら思春期に親しい女友達から貰う複数の「第二の名前」、(3)祖霊名、の三種類の名前がある。(1)、(2)は正式の名前ではなく、命名儀式を伴わない。

(3)は正式名で、ルイア諸民族でもマラゴリ人は、生後間もなくその命名儀礼を行う。一方、ブクス人は、子供が絶えず泣いていたり急性の病気に罹った場合、自分の名前をその子に与えようとする特定の祖先の意志表示だと考える。そこで、占い師にその祖霊を同定して貰って名付け儀礼を執行する。子供が元気な場合は、若者であればイニシエーション直後に、娘であれば結婚式の直前にそれを執行する。つまり、祖霊名には、成人の地位を獲得する要件であるという一面がある。だが、一層重要なのは、名前を貰った祖霊が子供の守護者になるとされている事だ。

祖霊名を与える祖霊は同性に限られるし、

独身者や子供のなかった人、当該の子供の誕生後に没した人は考慮されない。それゆえ、父方または母方の祖父（女性は祖母）から祖霊名を貰う場合がきわめて多い [Wagner, G., *The Bantu of Kenya*, vol. 1, 1949]。

こうした事情から、今日ルイア人は、必ずしも定式はないが、(2)と(3)を組合せ、「Aを祖父（祖母）とするB」という方式で自分の名前を表示する事が多いのである。

### 父系出自原理と母系の祖霊名

重要なのは、ルイア人が父称ならぬ「祖父（祖母）称」を正式名とする事実だけではない。ルイア人は父系民族でありながら、実際には正式名を往々母方の祖父（祖母）から貰う事が本稿の観点からは一層重要なのだ。

一方の祖父だけが生きている場合、先に記した命名規則によって、孫息子は死んだ祖父から祖霊名を貰う。もし両方が既に死んでいれば、母方の祖父がより最近死んだ場合や影響力のある人物だった場合が特に厄介だ。祖霊は誰もが我先に子孫に名前を与えたり、先を越されれば憤激するからである。

こうした場合、両方の祖父の名前が同時に孫息子に与えられ、両者が保護者になる。ただし、一方が「頭目」もう一方が「従僕」と呼ばれる。通常は父方の祖父が「頭目」になるが、それは絶対ではなく、判断は「各々の祖父の社会的な位置を勘案」できる占い師に委ねられるのである [Wagner, G., *ibid.*]。

### アフリカ社会のイメージと現実

産業化以前の社会の大きな特徴は、家族や親族の原理が行動規範を支配する事である。

そして、アフリカを研究した人類学者は、一人の祖先を頂点とし、そこから男性または女性の一方の系列だけで系譜を辿る人々の集団が共同性の強い出自集団（氏族）をなすという単系出自理論を提出した [Fortes, M. and E. E. Evans-Pritchard (eds.), *African Political Systems*, 1940]。そうした氏族の分節段

階でも、確実に始祖まで系譜が辿れる人々で構成されるリネージこそが中核であり、それ以上の段階は系譜関係に依存する政治構造をなすと言うのだ。アフリカの平等社会は、従来このモデルで理解されて来たと言える。

では、父系のルイア人が往々母方の祖父の名前を自分の正式名とするのはなぜだろうか。その理由が母方親族との政治的連帯の願望である事は既に明らかであろう。名前を貰った祖霊は守護者となる。特に母方の祖父が重要人物である場合には彼が重視されるのだ。

単系出自理論は一つのモデルに過ぎず、不可避免的に過剰な強調がある。人々の連帯は系譜が支配する垂直方向だけではなく、婚姻を媒介とする水平方向にも広がると見るのが、東南アジアや南太平洋の研究から得られたキンドレッド理論である。また、婚姻関係の重複的な展開が現実の人間関係を決めると、動態論的に見る事も出来る。更に、この地域の研究は、父系または母系の出自を個人が選択できるという双系出自理論を生んだ。

### 構造と人間

前産業社会では出自が行動を拘束するという固い構造＝機能論に対して、上の諸理論は社会構造それ自体が既に個人の多様な選択の可能性を内蔵すると見る柔らかな構造論である。観点の強調点の差でもあるが、どの社会にも二つの力が働いていると考えるべきだ。実際中村伸浩氏によると、ルイア諸民族でもイスハ人は、父方と母方の祖父（祖母）の両方の名前を貰い、そのいずれかを連名に用いる [私信]。

確かに、キプシギスなどのナイル語系の牧畜民社会では、父系出自原理はルイア人に比べて遙かに強固である。しかし、それを中和する慣行も少なくない。ルイア人の命名法は、アフリカ社会を先の視点からもう一度相対化する必要性を強く示唆していると思う。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）